

カリキュラムを通した学習成果の 評価を考える

近畿大学IR・教育支援センター 竹中喜一

本分科会のねらい

- カリキュラムを通した学習成果を評価する目的を説明することができる
- アセスメントプランの構成要素を説明することができる
- 直接評価および間接評価によるカリキュラム評価の方法をそれぞれ説明することができる
- 所属組織のカリキュラム評価の結果の活用にあたっての現状と課題について議論することができる

カリキュラム評価と学習成果の評価

- 「アセスメントとは、学生の学びに影響を与える意思決定に役立てるために、時間や専門知識、利用可能な資源を用いて学生の学びの情報を組織的・計画的に収集することである」

(ウォルワード 2013)

- カリキュラム評価に含まれる要素

- ・法令や学内規則が遵守されているか
- ・学校が掲げる教育理念や教育目標と整合しているか
- ・教育にあたって、リソースを適正に活用し最適な効果をあげられているか

(辰野他監修 2006)

→ 学習成果の評価はカリキュラム評価を構成する要素の1つで、不可欠の要素

アセスメントプラン(ポリシー)

- 学生の学習成果の評価(アセスメント)について、その目的、学位プログラム共通の考え方や尺度、達成すべき質的水準及び具体的実施方法などについて定めた学内の方針

(中央教育審議会 2020)

- 文章と図表の形でつくられる
- 作成の単位
 - ・ 全学レベル
 - ・ 学位プログラムレベル
 - ・ 科目レベル

アセスメントプランの要素

- 何を評価するか
 - ・ 能力
 - ・ 学習行動
 - ・ 満足度
- 誰を、いつ、何回評価するか
- 誰が(どのような体制で)評価するか
- どのような方法で評価するか
 - ・ テスト、レポート、発表、実演
 - ・ 学生に対するアンケート
- 評価結果をどのような基準で判断するか
- 結果をどのように活かすか
 - ・ 報告、フィードバック先
 - ・ 改善方法

アセスメントプラン事例①

評価主体＼時期	入学前・入学時 (アドミッション・ポリシー)	在学中 (カリキュラム・ポリシー)	卒業時・卒業後 (ディプロマ・ポリシー)
機関レベル	入学試験問題・入学試験結果 入学前教育プログラム 汎用技能調査 (GPS-Academic) 留学意識調査 留学生日本語能力試験証明書	学生アンケート (学生生活実態調査) GPA 単位修得状況 成績分布 留年者数・留年率 退学者数・退学率 休学者数・休学率 ボランティア単位認定実績 インターンシップ単位認定実績 留学プログラム参加実績 国際インターンシップ参加実績 資格講座開催・出席実績 資格取得状況 単位互換制度実績 文理融合科目開講・受講実績 学外組織連携プログラム実績	卒業者数・卒業率 学位授与数・授与率 GPA 大学院進学者数・進学率 就職状況・就職率 資格取得・国家試験合格実績 教員・公務員採用状況 卒業生アンケート OB・OGアンケート 就職・採用先アンケート
教育課程レベルでの 全学的取り組み	入学試験問題・入学試験結果 学修ポートフォリオ	GPA 単位修得状況 成績分布 出席状況 カリキュラムマップ・ツリー 学修ポートフォリオ 授業評価アンケート 国際インターンシップ参加実績	GPA 卒業研究・卒業論文・卒業制作 大学院進学者数・進学率 就職状況・就職率 卒業生アンケート 学修ポートフォリオ
科目レベルでの 全学的取り組み	英語プレイスメントテスト	単位修得状況 科目合格率 成績分布 出席状況 授業評価アンケート	

アセスメントプラン事例②

No.	名称	時期・頻度	学年	主な質問項目、内容等	手法	実施責任部署	結果の活用方法
1	新入生アンケート	毎年4月	1年生	本学への満足度、入学前の学習状況、海外留学の意識、卒業後の進路	Webアンケート	教育・学生支援機構	教育・学生支援機構が教育学生支援会議に報告し、各学部の学習支援や初年次教育などカリキュラムの改善、自己点検・評価、情報公開に活用
2	学年末アンケート	毎年1-3月	全学年	学習行動、授業・カリキュラム満足度	Webアンケート	教育・学生支援機構	教育・学生支援機構が教育学生支援会議に報告し、各学部の授業方法やカリキュラム改善、学習支援や学習環境の充実、自己点検・評価、情報公開に活用
3	卒業予定者アンケート	毎年1-3月	4年生	在学中の状況、愛大学生コンピテンシーの習得状況	Webアンケート	教育・学生支援機構	教育・学生支援機構が教育学生支援会議に報告し、各学部のカリキュラム改善、学習支援や学習環境の充実、自己点検・評価、情報公開に活用
4	授業アンケート (共通教育)	毎年4回 (各クオーター)	全学年	学習の状況、授業の満足度	Webアンケート	教育・学生支援機構	教育・学生支援機構(共通教育センター)が共通教育センター会議に報告し、共通教育の授業方法やカリキュラム改善、自己点検・評価に活用
5	成績不振学生の調査	毎年2回	全学年	学業不振の状況(GPA、修得単位数、休学者数)	修学支援システム	教育・学生支援機構／各学部	各学部が教育学生支援会議に報告し、各学部の学習支援の改善、カリキュラム改善、自己点検・評価に活用
6	休退学調査	毎年1回	全学年	休学者数、退学者数	修学支援システム	教育・学生支援機構／各学部	各学部が教育学生支援会議に報告し、各学部の学習支援の改善、カリキュラム改善、自己点検・評価に活用
7	学生モニター会議	ニーズに応じて	全学年 (学生代表者)	学習行動、授業・カリキュラム満足度	インタビュー調査	教育・学生支援機構	教育・学生支援機構が各学部に報告し、授業方法やカリキュラム改善、学習支援や学習環境の充実、自己点検・評価に活用
8	学生代表者会議	毎年1回	全学年 (学生代表者)	キャンパスライフ、カリキュラム満足度、大学への要望	学長と意見交換	教育・学生支援機構	教育・学生支援機構が関係部署に報告し、学生へのフィードバックを検討
9	卒業者の進路状況	毎年1回	4年生	卒業者の進路(就職率、県内就職率、進学率)、就職支援への評価	修学支援システム	教育・学生支援機構	教育・学生支援機構が教育学生支援会議に報告し、就職支援の充実、自己点検・評価、情報公開に活用
10	卒業生調査	毎年1回	卒業後3年経過の卒業生	現在の就業状況、大学に対する満足度、大学で身についた能力、授業や教育プログラムへの意見・要望	Webアンケート	教育・学生支援機構	教育・学生支援機構が教育学生支援会議に報告し、各学部のカリキュラム改善、学習支援や学習環境の充実、自己点検・評価、情報公開に活用

学習成果の評価方法

■ 直接評価

- ・何ができるか？
- ・テスト、論文、発表などで学生の知識や行為から学習成果を直接的に評価
- ・学生の学びのプロセスや行動を把握しにくい

■ 間接評価

- ・何ができると思っているのか？
- ・学生へのアンケートで学習についての自己認識から、学習成果を間接的に評価
- ・学生の学習行動や経験、満足度も把握できる
- ・あくまで学生の主観であることには注意

基盤力テスト(香川大学)

■ R検定

No	テーマ	設問数	配点	平均点
1	・リスクマネジメントの必要性 ・リスクとは何か	4 問	5 点	3.33 点
2	・学校教育のリスク ・海外でのリスクマネジメント	5 問	5 点	3.12 点
3	・医療のリスク ・社会インフラ管理のリスク	5 問	5 点	4.49 点
4	・リスクと保険 ・金融と資本主義社会のリスク	3 問	5 点	3.11 点
5	・情報セキュリティの基礎	5 問	5 点	2.84 点
6	・リスク評価の基礎	3 問	5 点	2.36 点
7	・リスクマネジメントの必要性 ・リスクマネジメントの基礎	4 問	5 点	2.13 点
8	・FMEA を用いた「モノづくり」の リスクマネジメント ・リスクマネジメントとデザイン	4 問	5 点	2.51 点
合計		33 問	40 点	23.88 点

■ I検定

No	テーマ	設問数	配点	平均点
1	・インフォマティクスの必要性 ・ネットワーク技術	5 問	5 点	1.91 点
2	・インターネット利用における脅威と対策	5 問	5 点	3.06 点
3	・社会におけるデータ・AI 利活用 ・データリテラシー	5 問	5 点	3.16 点
4	・データ・AI 利活用における留意事項	5 問	5 点	3.01 点
5	・情報セキュリティと暗号	5 問	5 点	3.24 点
6	・人工知能 (AI)	5 問	5 点	2.82 点
7	・コミュニケーションと協調作業 ・論理性・客観性	5 問	5 点	1.70 点
8	・システム的思考に基づく問題解決	5 問	5 点	2.14 点
合計		40 問	40 点	21.04 点

(藤澤他 2023)

パフォーマンス評価

- 知識やスキルを使いこなす(活用・応用・総合する)ことを求める問題や課題などへの取り組みを通して評価する方法の総称
- レポートなどの完成作品、プレゼンテーションや演劇などの実演、物語や脚本、詩、曲、絵画といった作品を評価するものなどが含まれる

(西岡他編 2015)

→ パフォーマンス評価を行うためのツールの
1つが、ループリック

DPルーブリックの例

項目	内容	4 応用レベル	3 実用レベル	2 ミニマムレベル	1 スタートレベル	0 克服すべきレベル
最新の専門知識及び技術 (専門知識・技術)	人間の発達を支援する教育及び文化についての専門知識や技術を身につけている	専門分野に関する知識・技術が十分に身についており、非専門とする者に説明することもできる	専門分野に関する知識・技術がある程度身についており、同じ分野の下級生などに助言することもできる	専門分野に関する知識・技術の基礎・基本が身についており、専門分野に関する情報を自分で収集することができる	学類・コースで学修できる専門分野の概要を知っており、高校までの学びとのつながり(系統性)を理解している	学類・コースで学修できる専門分野と高校までの学びとの関係が理解できていない
本質を見極めるための教養と学際性 (教養と学際性)	現代的課題や地域的課題への問題意識をもち、個々の事象を複数の観点から捉えることができる	現代的課題や地域的課題を幅広い教養で受け止め、自身の専門分野を活かしつつ学際的に探究することができる	自身の専門以外の分野に関する知識・技術を理解しており、現代的課題や地域的課題について複眼的に思考することができる	現代的課題や地域的課題に関する知識・技術を理解しており、人文・社会・自然の各分野に関する基礎的知識・技術をバランスよく学んでいる	高校までの学びと大学での基盤教育を関連づけながら、人文・社会・自然の各分野についてより深く学んでいる	大学の基盤教育が高校までの学びの延長上有ることを理解していない
協働的な問題探究 (社会的スキル)	人や文化の多様性を理解し、共感的態度をもって、価値観や考え方の違いを超えた関係を形成するスキルを身につけて活用することができる	高度な社会的スキルが身についており、価値観や考え方の異なる他者と協働して問題を探究・解決することができる	価値観や考え方の違う多様な人々と協働し、自身の役割を意識して参加することができる	価値観や考え方の違う多様な人々と共感をもって接することができる	人や文化の多様性を理解することができる	人や文化の多様性に対する理解が不十分である
社会の改善につなげる創造性 (認知的スキル)	学問固有の問題の立て方、ものの見方、思考法を身についており、それらを活用しつつ社会の改善に向けて深く探究したり効果的に表現したりすることができます	専門的で高度なスキルが十分に身についており、それらを活用しつつ社会の改善に向けて深く探究したり効果的に表現したりすることができます	専門的で高度なスキルがある程度身についており、それらを活用しつつ問題の解決に向けて考察することができる	汎用的・基礎的なアカデミックスキルが十分に身についており、それらを活用しつつ問題の解決に向けて考察することができる	汎用的・基礎的なアカデミックスキル(課題選定、情報の収集と分析、発表・報告などに関する知識・技術)を理解している	学問には、課題選定、情報の収集と分析、発表・報告などに関する知識・技術が必要であることを理解していない
市民としての主体的態度 (態度や価値観)	人間の発達を支援する者としての自覚をもち、人間の発達や文化の発展に寄与しようと努力する	人間の発達や文化の発展のために何ができるかを自覚し、主体的に社会へ貢献しようとする強い意思と意欲をもっている	大学での学修と現代社会との関係を理解し、人間の発達や文化の発展のために何ができるかを真摯に探ろうとしている	上記の4つのディプロマ・ポリシーを計画的、継続的に身につけようとしている	上記の4つのディプロマ・ポリシーを理解し、どのように身につければよいかを主体的に探ろうとしている	上記の4つのディプロマ・ポリシーを身につけようとする意思や意欲を欠いている

卒業論文ルーブリックの例

	5	4	3	2	1
先行研究	国内外の先行研究を把握し、整理して説明できる。	国外の先行研究も把握しているが、整理して説明することができない。	国内の先行研究を把握し、整理して説明できる。	国内の先行研究を把握しているが、整理して説明できない。	国内の先行研究を把握できていない。
問題設定	適切で明確な問題を設定しており、独創性がある。	適切で明確な問題を設定しているが、独創性はない。	ある程度、明確で適切な問題を設定している。	ある程度明確な問題を設定しているが、適切な問題であるとはいえない。	問題の設定が曖昧である。
資料	選択	適切な複数の資料(原語)を使用している。	適切な複数の資料(翻訳)を使用している。	適切な単一の資料(原語)を使用している。	適切な単一の資料(翻訳)を使用している。
	読解	資料を正確に読解できている。	若干の問題はあるが、ほぼ正確に資料を読解できている。	7割方読解できている。	資料を正確に読解できている部分とできていない部分が半々である。
	分析	資料を正確に分析し、それを十分に説明できている。	資料を適切に分析できているが、説明が不十分である。	概ね適切に分析し、それを説明することができている。	概ね適切に分析できているが、説明が不十分である。
考察		資料の分析に基づき、論理的整合性をもった考察を加えている。	資料の分析に基づき、ほぼ論理的整合性をもった考察を加えている。	概ね資料の分析に基づき、ほぼ論理的整合性をもった考察を加えている。	概ね資料の分析に基づいているが、論理的整合性に欠ける。
表現	文章化	伝達した内容を全て的確に文章化できている。	伝達した内容をほぼ的確に文章化できている。	伝達した内容を、7割方は的確に文章化できている。	伝達した内容を、あまり的確に文章化できていない。
	誤字・脱字	誤字・脱字が全くない。	若干(1, 2箇所)の誤字・脱字がある。	誤字・脱字が3, 4箇所ある。	誤字・脱字がやや目立つ。
基本的技術	典拠・典拠箇所の明示	典拠・典拠箇所が全て明示されている。	典拠・典拠箇所がほぼ明示されている。	典拠・典拠箇所の明示が書けている部分がある。	典拠は示されているが、典拠箇所が明示されていない。
	参考文献表の作成	適切な書式で、欠落・余分なく参考文献表が作成されている。	参考文献表に欠落・余分はないが、書式が適切ではない。	適切な書式ではあるが、参考文献表に欠落・余分がある。	参考文献表に欠落・余分があり、書式も適切ではない。
	論文の書式	指定の書式に全て従っている。	指定の書式にほぼ従っている。	指定の書式に7割方従っている。	指定の書式にあまり従っていない。

(出所:龍谷大学文学部2023年度履修要項Webサイト

<https://monkey.fks.ryukoku.ac.jp/~kyoga/rishu/pdf/01/2023/L2023youkou20230309.pdf>)

卒業論文ルーブリックの論点

- ルーブリックの種類
 - ・プロセス、論文、発表会のいずれを対象にするか？
 - ・中間発表と最終発表で分ける？
- 成績評価にどこまで含めるか
 - ・すべての観点？ 一部の観点を除く？
- 観点、尺度、基準の記述語の共通認識はあるか
 - ・「普通」「優れている」とは、どの程度？
- ディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーとどのように関連しているか
 - ・集大成としての卒業論文→DP達成度合いと関連？
 - ・CPに記載している卒業論文の位置づけと対応している？

重要科目の設定および評価

- PEPA(Pivotal Embedded Performance Assessment)
「重要科目での埋め込み型パフォーマンス評価」
 - ・重要科目：
その科目の目標がプログラム全体の目標に直結し、複数の教員が関わるような科目(斎藤・松下 2021)
 - ・同じルーブリックを複数の重要科目で活用

例：1年次必修の科目Aと、2年次必修の科目B
→ 科目A・Bの目標をカリキュラムとしての目標と直結させることにより、学習成果の到達度を経年に評価することができる

PEPAで用いられるルーブリック例

- 「大学学習法1」(1年次配当)と「大学学習法2」(2年次配当)
で用いられるライティングルーブリック (斎藤他 2017)

観点	問題解決			論理的思考		文章表現
	背景と問題	主張と結論	根拠と事実・データ	対立意見の検討	全体構成	表現ルール
観点の説明	与えられたテーマから自分で問題を設定する。	設定した問題に対し、展開してきた自分の主張を関連づけながら、結論を導く。	自分の主張を支える根拠を述べ、根拠の真実性を立証する事実・データを明らかにする。	自分の主張と対立する意見を取り上げ、それに対して論駁(問題点の指摘)を行う。	問題の設定から結論にいたる過程を論理的に組み立て、表現する。	研究レポートとしてのルール・規範を守り、適した文章と言い回しを用いてレポートを作成する。
レベル3	与えられたテーマから問題を設定し、論ずる意義も含め、その問題を取り上げた理由や背景について述べている。	設定した問題に対し、展開してきた自分の主張を関連づけながら、結論を導いている。結論は一般論にとどまらず、独自性を有している。	自分の主張の根拠が述べられており、かつ根拠の真実性を立証する信頼できる複数の事実・データが示されている。	自分の主張と対立するいくつかの意見を取り上げ、それらすべてに対して論駁(問題点の指摘)を行っている。	問題の設定から結論にいたる論理的な組み立て、記述の順序、パラグラフの接続が整っている。概要は本文の内容を的確に要約している。	<ul style="list-style-type: none"> 研究レポートとして適した文章と言い回しを用いてレポートを書いている。 引用部分と自分の文章の区別を明示し、引用部分については、レポートの最後に出所を確認できる形で参考文献を記載している。 概要、本文ともに字数制限が守られている。 <p><3つの条件をすべて満たす場合は「レベル3」、2つの場合は「レベル2」、1つの場合は「レベル1」とする。></p>
レベル2 2年次の目標	与えられたテーマから問題を設定し、その問題を取り上げた理由や背景について述べている。	設定した問題に対し、展開してきた自分の主張を関連づけながら、結論を導いている。	自分の主張の根拠が述べられており、かつ根拠の真実性を立証する信頼できる事実・データが少なくとも一つ示されている。	自分の主張と対立する少なくとも一つの意見を取り上げ、それにに対して論駁(問題点の指摘)を行っている。	問題の設定から結論にいたる論理的な組み立て、記述の順序、パラグラフの接続がおおむね整っている。	
レベル1 1年次の目標	与えられたテーマから問題を設定しているが、その問題を取り上げた理由や背景の内容が不十分である。	結論は述べられているが、展開してきた自分の主張との関連づけが不十分である。	自分の主張の根拠は述べられているが、根拠の真実性を立証する信頼できる事実・データが明らかにされていない。	自分の主張と対立する意見を取り上げているが、それに対して論駁(問題点の指摘)がなされていない。	問題の設定から結論にいたるアウトラインはたどれるが、記述の順序やパラグラフの接続に難点のある箇所が散見される。	
レベル0	レベル1を満たさない場合はゼロを割り当てること。					

DP達成度の評価

1) 幅広い教養と人文社会諸科学の基本的な知識を身につけている。



2) 人文社会諸科学のいずれかの分野の専門的知識と技能を身につけている。



3) 人間・文化・社会の在り方について、グローカル・マインドに立脚した多角的な視点から、論理的にかつ客観的に分析し考察することができる。



4) 課題を自ら設定し、それぞれの学問領域の研究手法に即してその解決策を考えることができる。



5) つねに学び続け、身につけた知識・技能を活かしてグローバル化した現代社会に貢献しようとする意欲をもっている。



6) グローバル化した現代社会において、様々な人と協働することができる。



7) 必要な情報を幅広く収集し、的確に整理・分析することができる。



8) グローバル化した現代社会において活躍できる、的確なコミュニケーション能力をもっている。



0.0% 10.0% 20.0% 30.0% 40.0% 50.0% 60.0% 70.0% 80.0% 90.0% 100.0%

■ とても身についた ■ 身についた ■ ある程度身についた ■ 身についていない ■ 全く身についていない ■ わからない

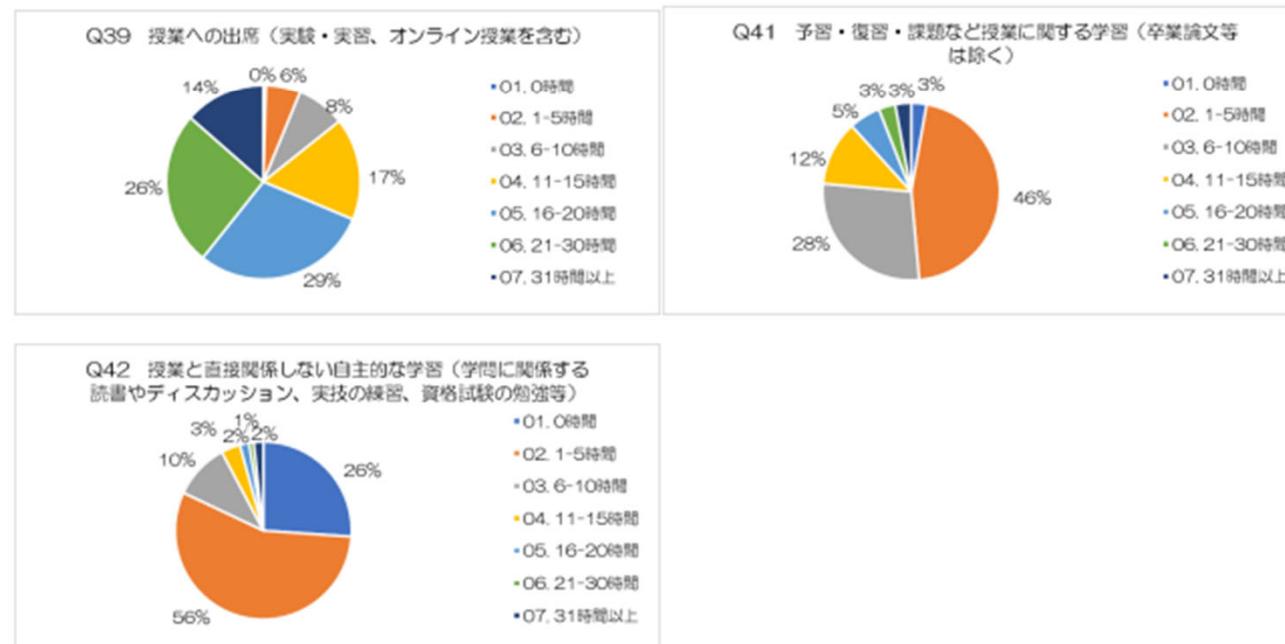
出所:愛媛大学Webサイト(<https://web.opar.ehime-u.ac.jp/wp1/wp-content/uploads/2023/07/IRreport-vol38.pdf>)

学習行動を尋ねる設問

問5 今年度後期の授業期間中の平均的な1週間（7日間）の生活時間は、それぞれどのくらいですか。

授業への出席は2年生で16時間以上が69%、4年生以上で5時間以下が62%。卒業論文等は4年生以上で16時間以上が37%。授業に関する学習は5時間以下が2年生で49%、4年生以上で77%。²授業と直接関係しない自主的な学習は5時間以下が2年生で82%、4年生以上で64%。部活動／サークル活動は0時間が66%。アルバイト等は11時間以上が45%。

◆2年生（Q39、Q41、Q42について）



学生モニターアンケート

- 各学科/コース/専攻から数名ずつの学生モニターを招集
- 半期/1年/在学期間を振り返っての意見を指定用紙に記述
- 記述内容について同じカリキュラムの学生同士で議論し、適宜追記した後に提出
- 記述内容を取りまとめ、コンサルタント教員が学部代表教員にフィードバック

達成すべき質的水準の例

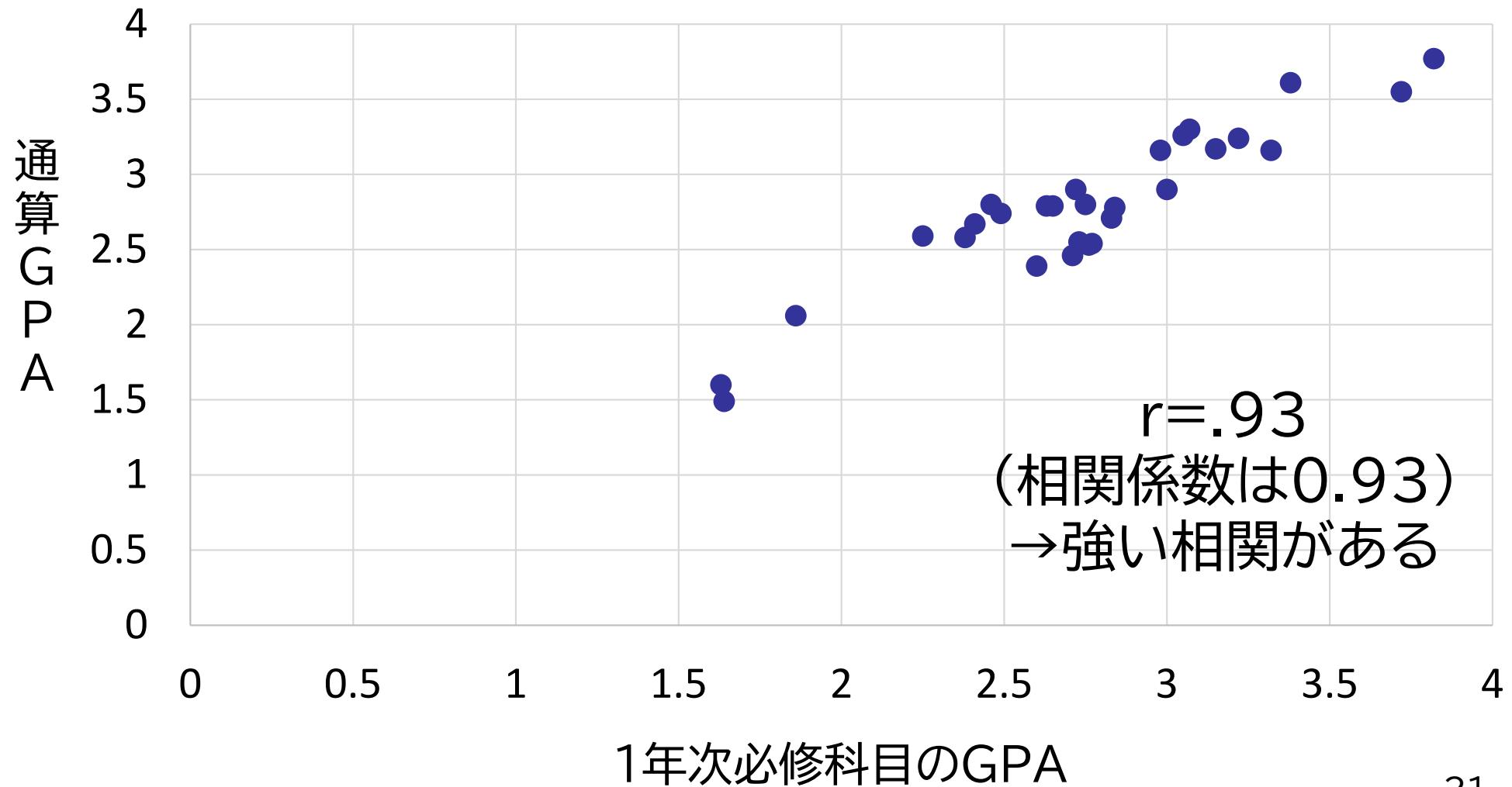
- 成績評価の基準
 - ・授業科目、教育課程として達成すべき水準
(例:GPIは1、GPAは1.2(各年)、1.5(卒業時))
- 修得単位数の基準
 - ・学年ごとの単位と累積単位
(例:1年次24単位、2年次48単位、3年次78単位)
- DPルーブリックや卒業研究ルーブリック
(例:ルーブリック○段階中○以上)

分析の切り口

- 過去との比較や関連
- 集団間のデータの比較や関連
 - 男女別、学部別、学年別、入試形態別などの大学内の比較、他大学や全国平均など
- 法規や外部機関が定めている基準との比較
- 目標や計画の達成・実現度合いの分析
- 設定した仮説に基づく分析
 - 日常業務での経験や感覚、それらに基づく問い合わせや疑問

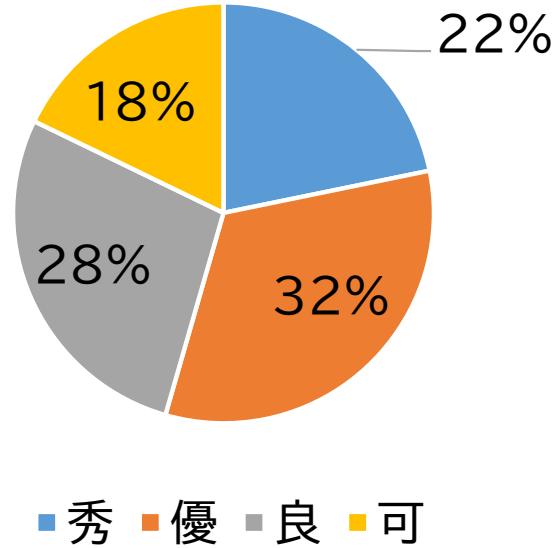
1年次必修科目の学習成果とGPA

1年次必修科目のGPAと通算GPA

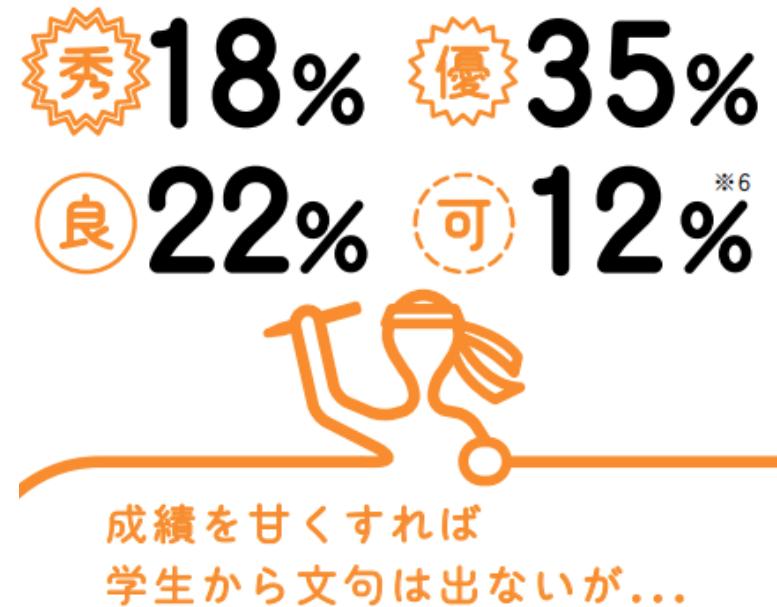


成績評価は適切に行われているか

全国調査における成績評価の分布状況



全授業の成績評価の分布状況



(愛媛大学教育・学生支援
機構教育企画室 2015)

- 多様な解釈がある
 - ・成績のつけ方、授業の難易度、教え方、学生の能力
- 追加で行える分析
 - ・学部・学科ごと、共通／専門、受講者数別、遠隔／対面

成績データとの相関

表4 GPAとの相関：教育学部

対象	分類	設問	選択肢	相関係数
2年次	生活時間	1 学期中の授業・実験の課題、準備・復習に費やす時間（1週間の平均的時間数）を回答してください。		.411**
2年次	進路・就職	2 卒業後は宮崎県に残る予定ですか。	宮崎県に残る予定	.387**
2年次	生活時間	3 学期中の授業・実験に出席する時間（1週間の平均的時間数）を回答してください。		.383**
2年次	生活全般	4 学生生活を続けていく上で経済的な問題を抱えていますか。		.376**
2年次	生活時間	5 学期中の授業とは関係ない学習に費やす時間（1週間の平均的時間数）を回答してください。		.342*
初年次	進路・就職	6 卒業後は宮崎県に残る予定ですか。	宮崎県に残る予定である	.324*
最終年次	生活全般	7 大学での学習や生活の中で困ったことに直面したとき、周囲になるべく広く意見やアドバイスを仰ぎますか。		.321*
最終年次	選挙	8 あなたは公職選挙法に定める選挙の投票を行ったことがありますか。		.320*
初年次	入学時	9 高校の所在地はどこですか。	宮崎県	.313*
最終年次	留学	10 留学経験によりあなたの意識や行動に変化はありましたか。	異文化理解が深まった	.301*
2年次	生活全般	11 住居の条件や環境に問題を抱えていますか。		.294*
最終年次	留学	12 留学の目的は何でしたか。	語学以外の学習	.289*
初年次	入学時	13 宮崎大学のオープンキャンパスに参加しましたか。		.285*
2年次	基礎教育	14 基礎教育について、授業は将来役に立つと思いますか。		.285*
最終年次	留学	15 留学の目的は何でしたか。	語学	.282*
最終年次	進路・就職	16 就職希望先を決める場合、特に重視する項目は何ですか。	給与・報酬	.279*
最終年次	生活全般	17 あなたは、大学内にどのような友人がいますか。	学習やスポーツで競い合う友達	-.313*
初年次	教育目標	18 どのようなメディアによって入学者受け入れ方針（アドミッションポリシー）を知りましたか。	受験雑誌	-.318*
最終年次	選挙	19 投票に行かなかった理由は何ですか。	現在の移住地に住民票がなく、投票の場所が遠いため	-.374**

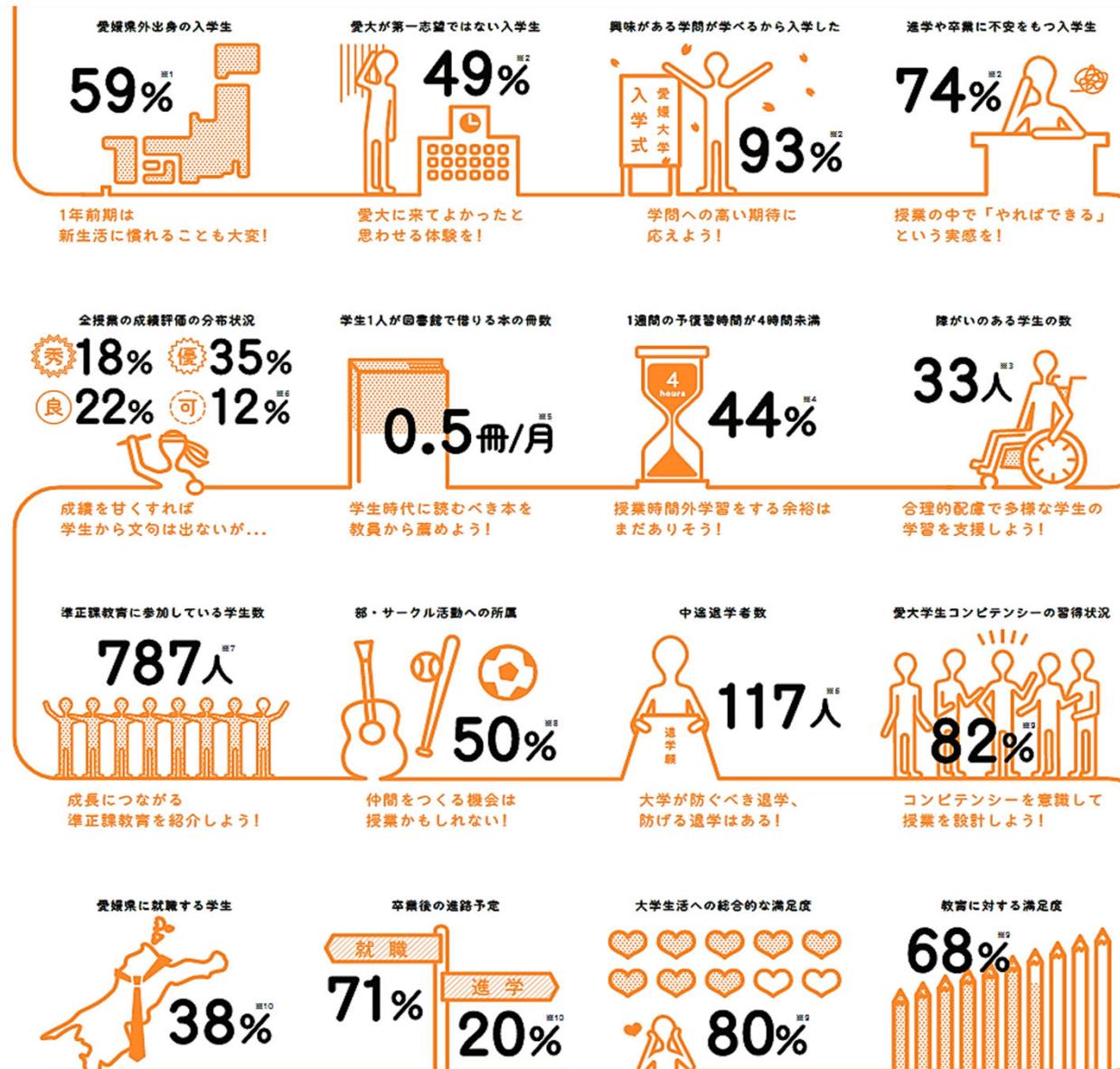
分析の切り口 具体例

- 深夜バイト(例:22時以降)や長時間バイト(例:週平均21時間以上)している学生は、GPAが低くなる
- 留学経験がある学生は、留学前に比べTOEICスコアが高くなる
- 卒業時GPAと、希望する企業等に就職できたかどうかには関係性がみられない
- 理工系学科の学生は、それ以外の学科と比べてストレートで卒業する割合(標準修業年限卒業率)が低くなる

情報提供から改善への過程

- 分析結果を提供する
- 分析結果について議論する
 - ・教授会
 - ・学部執行部の打ち合わせ
 - ・学長との面談
 - ・FD研修会
- 問題点を洗い出す
- 改善策を考える
- 改善策に必要なリソースを増やす
- 改善策の実行に必要な意思決定を行う

評価結果の提供例



(愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 2015)

意思決定につながる論理

- 過去よりよい／悪い
- 他の集団よりよい／悪い
- 目標や計画よりよい／悪い
- 設定した仮説の肯定／否定
- 長所を伸ばす／短所を克服する
- 費用対効果がよい／悪い
- 学生のニーズが高い／低い
- 市場のニーズが高い／低い

本セッションのまとめ

- カリキュラムを通した学習成果の評価は、学生の学びに影響を与える意思決定に活用することを目的として行う。アセスメントプランとして評価の方針(計画)を立案する。
- アセスメントプランは、評価の方法や時期、評価の実施主体、評価の基準、評価結果の活用などで構成する。評価の方法は直接評価と間接評価に大別される。直接評価にはアセスメントテスト、卒業論文や重要科目でのパフォーマンス評価などが、間接評価にはDP達成度調査や学生モニターアクションなどがある。
- 学習成果のデータは、過去との比較や集団間の比較などにより分析される。分析結果を改善につなげるためには、評価結果を意思決定者の理解を促す形で共有する。実際に評価結果の議論の場をつくることも重要。その際、意思決定につながる論理を念頭に置く。

参考文献

- バーバラ・ウォルワード(山崎めぐみ、安野舞子、関田一彦訳)(2013)『大学教育アセスメント入門』ナカニシヤ出版.
- 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室(2015)「データから考える愛大授業改善Vol.1」
- 大野賢一・鳶田敏行・小湊卓夫・藤井都百・田中秀典・岡部康成(2021)「大学諸活動の分析から得られる共通知の妥当性－アンケート結果からみられる傾向と課題－」継続的改善のためのIR/IEセミナー2021発表資料
- 国立教育政策研究所(2016)「大学生の学習状態に関する調査研究について(概要)」
- 斎藤有吾・小野和宏・松下佳代(2017)「パフォーマンス評価における教員の評価と学生の自己評価・学生調査との関連」『日本教育工学会誌』40(Suppl.), 157-160.
- 斎藤有吾・松下佳代(2021)「PEPAによって学生の成長を縦断的に評価する」『大学教育学会誌』43(1), 74-78.
- 大学改革支援・学位授与機構(2021)『高等教育に関する質保証関係用語集第5版』.
- 中央教育審議会(2020)「教学マネジメント指針」
- 辰野千壽・石田恒好・北尾倫彦監修(2006)『教育評価事典』図書文化
- 西岡加名恵・石井英真・田中耕治編(2015)『新しい教育評価入門:人を育てる評価のために』有斐閣
- 日本高等教育開発協会(2019)『カリキュラムコーディネーター養成研修会<初級編>～組織がチームとして教育に取組むための仕組み作り～』2019年5月25～26日芝浦工業大学芝浦キャンパス研修配付資料.
- 藤澤修平・高橋尚志・宮崎英一・梶谷義雄・後藤田中(2023)「香川大学大学生のDRI能力の可視化－アセスメントテストの分析を通して－」『香川大学教育研究』第20号, 81-93.
- 武方壯一・吉田和子(2021)「学生アンケートの結果からみる学生生活と GPA の相関」『宮崎大学教育・学生支援センター紀要』第5号, 7-14
- 森朋子・紺田広明(2019)「教育プログラムの内部質保証に寄与する教学IRとは－学習の視点を中心に－」『大学論集』第50集, 209-221.